

第67回青少年読書感想文全国コンクール

三重県審査 優秀賞

2年 三谷 萌々香 (津市立豊里中学校)

人のために、人と一緒に (『君が夏を走らせる』瀬尾まい子著 新潮社)

以前、瀬尾まいこさんの本を読んだことがある。あたたかくて、好きだと思った。他の本も読んでみたいと思っていた。書店でたまたま手に取りあらずじに惹かれたこの本も瀬尾さんの本で、何か縁を感じたため、読むことにした。高校二年生の夏休みの話。私との共通点はそれだけだ。不良の大田が先輩の娘鈴香の面倒を一ヶ月間見るといふ非現実的な話。それなのに、鈴香に癒されたり大田を応援したりする時間はとても心地良くて、少なくなっていく二人の時間と本のページ数に寂しくなった。

この本を読んで大切にすべきだと思ったのは、「人のためにしたい」と「人と一緒にしたい」という二つの気持ちである。

大田は自分のことをどうしようもない奴だと思っている。彼はたしかに不良だ。しかし、鈴香の世話を引き受け、料理をしたり公園に連れて行ったりする大田は立派な保護者であり、どうしようもない奴だとは思えない。自分に自信がなくてそう思い込んでしまっているのだ。自信の有無は周りの人に影響を受けると思う。得意なことがあっても、人に披露する機会がなかったり、自分よりすごい人と比べてしまったりすると、本当に得意なのかわからなくなる。私は何度かそのような経験をした。大田もそうなのだと思う。大田は走るのが速く、中学生のときに駅伝に参加したのがきっかけで自信をつけたが、不良ばかりの高校では走る機会がなかったのだ。自信をつけることよりも、自信を取り戻すことの方がよっぽど難しい。しかし、それを可能にするのもまた人だ。そう感じた場面がある。公園でお母さんと遊んでいる子どもたちを見て鈴香は泣き出してしまう。入院中の母が恋しくなったのだ。そんな鈴香が大田を動かした。

「残念だけど、俺はお前の親じゃねえ。でも、俺、たぶん、いや、明らかにダントツにどの親より、若いし、運動能力は飛びぬけてるぜ」

と言って鈴香を肩車し、公園を走ったのだ。鈴香のおかげで大田は自信を取り戻した。駅伝とも共通するが、誰かに必要とされて、その人のために努力することは自信につながるのだと思った。そして、自分のためにしたいことは見つからないが、鈴香のため、人のためにできることはあるという大田に共感した。自分がしたことで人が喜んでくれるのは嬉しい。必要とされている感じがする。「人のため」は「自分のため」でもあるのかもしれない。だから、人のためにしたいという気持ちは大切にすべきだと思った。

もう一つ、印象に残った場面がある。中学の陸上部の顧問上原に再会し、大田は今年の駅伝チームとタイムトライアルをすることになる。苦しみながらも鈴香の「ばんばってー」という声援によってわずかな差で一位でゴールする。そして気付く。「俺はただ走りたいんじゃない。どこでも走ればいいってわけではない」「誰だっていいから、誰かと同じ場所へ向かって、体を、気持ちを動かしたい」と。大田は人と競争して勝つことよりも人と一緒に走ること自体に価値を見出しているのだと思う。追いつきたい、追い抜きたい、そのような気持ちは一人で走っていても味わえない。誰かと一緒にないと生まれない感情は無数にある。もちろん、傷ついたり自信をなくしたりすることもあるだろう。それでも人と一緒にしたいと思えるなら、その気持ちは大切にすべきだと思う。また、大田は駅伝メンバーだけでなく、鈴香とも一緒に走っていたと思う。応援されると、その人の思いを背負うことになる。プレッシャーだと言われがちだが、一緒にがんばるよという意思表示にも捉えられる。鈴香は一歳ながら大田と一緒に走ってくれたのだ。何かを一緒にしてくれる人がいて、それを応援してくれる人がいるのは力になるし、実はとても貴重なことなのだと気付かされた。

この本から感じたことを、部活での自分と重ねてみた。私は演劇部に入っている。役者として舞台上に立つことが多い。演技が得意なわけでも、将来役者になりたいわけでもないけれど、一生懸命やっている。私が演劇を好きなのは、人のためにできることがたくさんあって、一緒にがんばる仲間もいるからだと思う。劇をより良くするために案を出すとき、それが採用されなかったとしても、みんなで聞いて考えてくれたことが嬉しいのだ。人のためにしたことが無駄じゃないと思えるのは幸せなことだと思う。また、演劇を見たりセリフを読んだりするのは一人でもできる。しかし、誰かと劇を作り上げることは今しかできない。みんなが劇を良いものにしたいという思いで動いている。大会で他校の劇を見て悔しいより楽しいと感じるのは、他校の部員も同じ思いで努力している仲間として見ているからだ。人のため、人と一緒に、このような気持ちを大切に持って部活をがんばろうと思ったし、この気持ちがあれば将来やりたいことも見つけられそうだと思う。



第67回青少年読書感想文全国コンクール

三重県審査 優良賞

2年 杉本 彩華（津市立津市立南が丘中学校）

「ランナー」を読んで （『ランナー』 あさのあつこ著 幻冬社）

私が今回読んだ本はあさのあつこさんが書いた「ランナー」という本です。

この本を選んだ理由は、私が中学から陸上競技を始めていて、長距離走者であることから、題名に興味を惹かれたからです。私と同じランナーについての小説であれば、共感できる部分が多くあるのではないかと考えながら読み始めました。

しかし読んでいくうちに、この本がただスポーツや青春について描かれた本ではないということに気がつきました。確かに陸上競技を中心に描かれているのですが、単にスポーツ小説と説明することができない、とても深い内容の物語でした。

主人公の碧季は高校生の長距離走者。監督が、「長距離走者になるために生まれてきたような奴なんだ」と言うほど才能があり、将来を期待されていました。しかし碧季は途中で陸上部を辞やめてしまいます。それは、離婚後精神的に崩れていく母親と、母親から暴力を受ける幼い妹を守るためだと。碧季自信が思い込んでいたのですが、曾字ではなかったのです。ただ一度、初めてレースで負けて、走ることが怖くなってしまったから なのでした。

長距離走に限らず、スポーツというものは、試合前や試合中の精神状態が結果に大きく関わるものだと思います。私も、レース前にマイナスなことを考えてしまって、思うように結果を出せなかったことが何度もあります。だから、碧季がレースで負けたのも、陸上競技から離れてしまったのも、家庭環境のことを考えると仕方のないことなのだろうと私も思いました。しかし、次の言葉に、本当のことに気付かされます。

「走るの 怖くねえか？ おれは、怖ええよ」

これは、碧季と同じように走ることが怖くなってしまった友人の本音の言葉です。この場面で碧季は、母親や妹のことが、走れない「原因」ではなく、走らない「言い訳」であったのだということに気付かされます。私は、碧季が初めてレースで負ける場面で、私の中学三年生の時のあるレースのことを思い出していたのですが、この場面でも改めて、そのとこのことについて考えさせられました。

夏に行われた市の大会で二千メートルのレースです。八位までに入ると県大会に出場することができるのですが、私はそこで九位でゴールしました。一年前の同じ大会では 八位以内に入ることができ、周りの人たちも期待して下さり、私自身も 三位以内に入ることを目標にしていました。それだけに、本当に悔しく、それ以降は競技をあまり楽しめなくなっていました。

私は、碧季に自分を重ねながら読み進めました。碧季の心情がよく理解できました。

「おれはレースを怖がっていたんだ。あの惨めさをあの苦痛を、走ることが苦役となる恐怖を二度と味わいたくなかった」

この碧季の言葉は特に私の心情と重なり、中学三年生の時の経験の記憶を鮮明に蘇らせ、胸が締めつけられました。

物語は最後、碧季がスタートラインに立つところで終わります。友人、マネージャー、監督、母親や妹に支えられているからこそ、碧季は一度挫折しながらも、もう一度スタートラインに立つことができたのだと思います。このことは、スポーツに限らず、人生においても同じようなことが言えると思います。

何かに挑戦して失敗したとき、もう一度挑戦することは簡単なことではないと思います。もう失敗したくないという思いから、挑戦することが怖くなってしまふからです。挑戦することが怖いと感じてしまったとき、それを認めなければ前に進むことができません。それは自分の弱さを認めることであり、簡単にできることではありません。そんなとき、家族や友人など、周りの人たちの支えによって再び挑戦することができるのだと思います。なにより、自分自身を信じるのが最も大切なのだということ、この本から学ぶことができました。

私が高校に入学して陸上競技部に入部したのは、走ることを楽しめないまま陸上競技を辞めたくない、もう一度挑戦したいと思ったからです。この本を読み終えて、私はそのことを再確認することができ、また、より強い決意へと変えることができました。

この本は、ランナーでなくても、スポーツをしている人でなくても、様々な挑戦をする人に勇気を与えてくれる本だと思います。読み終えたとき、一度諦めたことにもう一度挑戦してみよう、何か新しい挑戦をしてみよう、と思えるはずです。